

令和2年度 教育課程特例校 多治見市立笠原小学校の実践と成果

1 これまでの取組

笠原小学校は、平成15年度から平成29年度まで、5期15年に渡って『研究開発学校』の指定を受け、笠原中学校とともに「小中連携による外国語教育の在り方に関する研究実践」に取り組んできました。

その後、平成30年度からは、教育課程特例校として、第1学年から第6学年の6年間で330時間の『外国語科』を実施しています。実践的なコミュニケーション能力の育成をめざして、音声から言語を獲得するための適期とされている小学校低学年から、「聞く」「話す」活動を中心に「読む」「書く」活動を含めた外国語教育を展開してきました。

これまでの取組を支えているのは、笠原町内の「幼保小中の連携」です。外国語教育が、学びの場で連携の中核を担ってきました。今では地域や保護者からの強い期待もあり、特別の教育課程の編成・実施により成果を上げることを目指しています。

小学校学習指導要領の改訂によって、外国語が5年生から教科化されるなど、大きな転換期を迎えました。これまでの実践の成果を継承しつつ、地域の負託に応える学校を具現し、市内はもとより県内外に対しても小学校における外国語教育に関する教育情報の提供ができるよう研究実践に取り組んでいます。

2 令和2年度取組

令和2年度は、校内研究の主題を「生き生きとコミュニケーションを図る児童を育てる指導の工夫～笠原型コンテンツ・ベイストの手法を用いた授業づくりと自己の伸びを実感させる評価を通して～」として研究推進に取り組んできました。『笠原型コンテンツ・ベイスト』とは、伝え合う内容を重視し、問題解決的な活動により、伝え合う必然性を生み出す指導方法を探求するものです。

- ・『聞く・話す・読む・書く』の必然を生み出すとともに、コミュニケーションへの意欲を高める目的・場面・状況の設定
- ・児童の意欲、関心が高い学習事項を生かした題材
- ・驚きや発見、気付きの生まれる、伝え合う値打ちの高い内容

以上の3点から児童の育成を図ってきました。活動を通して、コミュニケーションのよさや自他のよさに気付く機会が増え、伝える言葉も豊かになっており、大きな成果となっています。



3 今後の方向性

教育課程特例校として、特別の教育課程の編成・実施を行う中で、「外国語科」の実践の継続とその検証を実施していきます。子供たちの外国語の力をより一層高めるための先進的な実践を、外国語の授業を通して多治見市内外の小学校に広めるなど、笠原小学校が多治見市における外国語教育のセンター的機能を担うことが期待されます。